国語プリントNo.（　　）

年　組　番　名前

配布日　月　日　曜

「みずすまし」は何の象徴か？を読んで

(01)私が「みずすまし」を読んで最初に思ったことは「何が言いたいのかよくわからない」ということだった。しかし授業で抽象的な詩であることを知り、その詩にどんな想いを込め、何を象徴しているのかを考えるのが課題となった。つまり「何が言いたいのか」を考える詩だったのだ。そして私はそれを考えた。しかし詩を読んで何を感じ、どう受け止めるかは読む人によって違う。つまり正解なんてないのだ。これはどういう事かというと答えを出すことではなく考えること、自分の考えを形にすることが大事ということだ。つまりこの「みずすまし」という詩を使った授業の目的は作者が詩に込めた想いを自分の考え、自分のことばで形にすることだったのである。これは生きていく上で非常に大事なことだ。

(02)私が気づいたことは二点ある。一点目は内容が暗いものが多かったこと。二点目は17行目は書き換えない人が多かったこと。

一点目について説明する。同級生の作品を読んで思ったことは死に関する内容が多かった。みずすましが水にもぐるなどの表現が死を連想させるせいなのだろうか。

二点目について説明する。作品のほとんどが17行目をそのまま書いていたので、17行目は印象的な文章であった。

(03)サッカーの象徴という作品を読んで気づいたことは、サッカーに怪我はつきものだということ。サッカーは足でボールを扱い、ボールを奪う時には相手と接触するので怪我がつきものだ。

サッカーの攻撃と守備をみずすましの生と死にかけているのがよかった。

この作品は文字数がみずすましと合っていて、リズムがよいと思った。表現の仕方も上手でとてもよい作品だと思った。

(04)私が「みずすまし」を読んで考えたことは、この作品は命や人の感情について書いていることが解った。その理由は私たちが生きている日常をみずすましの動作に置き換えていることが「思い半ばにすぎよう日常は分厚い」というフレーズでよく解る。

『『みずすまし』は何の象徴か」を読んで思ったことは、それぞれの作品が異なった象徴でかかれていてそれぞれの作者の個性が感じられた。様々な象徴があったが、だいたいの象徴が人の感情や日常のことについてか命についてかかれてある作品が多かった。

この二つをふまえて考えたことは、この作品は人などの動物の命について書いてあることが解り、日常が長いのは死んでからでは解らないということ。

(05)「みずすまし」を読んで、まず連想されたのが死でした。みずすましが水面を凹ませて浮いているように、私達も不安定な状態で生きている。いつ死ぬかもわからない。それでも人は危険や恐怖に触れたくなって死に近づく。作者はそのことを暗示的な行為として、みずすましが水にもぐると表現したのだと思います。また、水の阻止に出会うということは、水圧による抵抗で苦しくなり水面に上がろうともがく様子であり、死に瀕した人の生きようとする力に似ているのだと伝わってきました。

(06)みずすましは「社会」の象徴で、最近ニュースになっていた食品偽造問題についてかかれていて、改めて偽造や裏金など大変よくないことをして国民を困らせてはいけないと思った。みずすましとは関係ないと思う側はこのような作品の法が好きだし、理解できてよいと思う。気づいたことは、「社会」を書いた人は、ニュースをしっかり見ていると思う。また、もう少し上手にまとめられたらたくさんの人の気を引くことができるのでは？と思った。

(07)僕がみずすましを読んで考えて感じた印象は日常生活にありふれた人間の感情といった観念的なこと、そしてその変化をみずすましの生態や特

copyright © 2007 片桐史裕

徴に当てはめるという今までに勉強してきたものの中にはない、とても斬新な作品だと思いました。特に個人的に気になった点は比喩やそのたぐいのものが作中に大量に配置されて、それを主体として文章を構成統一していることです。しかし、だからといって読み手に内容が伝わり難いかといわれればそうでもなく、逆に読み手の過去に体験したことといったことを自身と照らし合わせるような魅力を持っている。ひじょうに珍しく、そして興味のわく作品という感想を持ちました。

今後も人生の中でこのような作品に出会えたらいいと思いました。

(08)私は同級生が書いた「みずすまし」は生命の象徴と読み取りました。この作品を読んで気づいたことは、この死の人物は何回も何回も生死の境を往来しているということに気づきました。また、この死の人物から読み取れることはまだ諦めないで、生きようとがんばっているということです。

考えたことは、この死の最後の方に「むくろを黙って死の淵へと抱きとってくれる」と書いてあるが、結局この人物は死んでしまったのか、それとも死なずにがんばっているのかということです。

(09)みずすましは、最初読んだ時あまり意味がわからなかった。しかし、時間が進むにつれ、少しずつ意味がわかってきた。みずすましは、昆虫だけれども、自分たち人間と、とても近いものを持っている気がした。

また、課題を出された時は、困ったが、遣っていくにつれて、なぜか楽しくなってきた。

みんなの作品を観ると、一人一人の個性が出ていて、おもしろいものばかりだった。自分が考えつかないような、手間もあり、感心した。

(10)友達が書いた作品と全く違っていて、具体的にかかれていてよいと思った。じぶんは、「一滴の水銀のように」とか「あれは暗示的な行為」とまねをして書いたのですが、友達はそれを自分なりに工夫して書いていたのですごいと思いました。

作品を作るということは、得意じゃないけど好きです。一度頭に宇金物は、自分なりに書いてみる。でも、友達は違った。自分よりはるか上で、抽象することは、誰が読んでも感心をするほどの作品だった。もっと自分もよく考え、文章をまとめて詩などを書いていきたいです。とても、勉強になったと思います。

(11)友達とか一緒に考えるのではなく、まずは自分一人で考えてみて自分だけの作品を考えていかなければならないと思った。友達と一緒のでは少し他人任せになってしまうし、おもしろくないし、一番の理由が自分の個性が出せないと思ったからである。

これからは他人任せにせず、自分の考えたのを書いていきたい。

(12)同級生の書いた「野球」についてですが、私も野球をしていたので、この作品を観てとてもうれしくなりました。皆さんは、野球というと、甲子園やプロ野球を考えると思いますが、この作品には、このような内容は一切書いてなく、日常での練習やベンチ、レギュラーになれなかったこと。そして何より怪我です。怪我というものは誰も怪我をしようと思ってするものではありません。いつ何時何が起こるかは誰もわかりません。

怪我をしてベンチに入れなかった人、レギュラーになれなかった人は、たまには出てきます。しかしそれでおしまいではないのです。どうやって少しでも早く治すか、どうやって怪我と共に練習を頑張って、今後ベンチそしてレギュラーをとるかというような内容が込められていました。

(13)「みずすまし」の作品を他の象徴に変えても分として成り立つし、読んでいる方にもちゃんと伝わることに気づいた。抽象名詞と具体名詞では抽象名詞の方が象徴として使われていることが多い。「みずすまし」にも他の人の作品にも象徴になるものの一生が描かれていた。

(14)「みずすまし」とは人の一生を表しています。まず最初の1から3行目では生まれたばかりの赤ちゃんのことを表しています。

そして4から9では約15歳から16歳くらいの社会的なこともわかっている子供を表しています。

そして10から17ではもう大人である程度生きている人を表しています。

そして18から最後の21ではその人の死を表しています。最後の前にかかれている「むくろを黙って水底へ抱きとってくれる。」ではその人の家族などの親族が死んでしまったその人をきれいに土へとかえしていることがわかります。

copyright © 2007 片桐史裕